

機関番号：23601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19592585

研究課題名（和文）中山間地域の里山における女性高齢者の健康資源開発に関する研究

研究課題名（英文）Satoyama as a resource for health promotion of elderly women living in mountain villages.

研究代表者

多賀谷 昭（TAGAYA AKIRA）

長野県看護大学・看護学部・教授

研究者番号：70117951

研究成果の概要（和文）：中山間地域の里山における女性高齢者のグループ農業の実態を調査し、人々の健康と地域社会に及ぼす影響とグループ農業が成立するための諸条件を検討した。その結果、グループ農業の活動は、地域アイデンティティの表出としてとらえることができ、相互扶助ネットワークの強化、共同体の維持、文化の伝承など、その多面的な機能により、地域住民の心身の健康を増進し保障すると考えられる。グループ農業の成立には、表出すべき地域アイデンティティおよびそれを認知する者の存在が必須と考えられる。

研究成果の概要（英文）：Effects of activities of old women's agricultural clubs in mountain villages on the health of people and community, as well as the conditions that enable existence of such clubs, were studied by participation observation and group interviews. We have found that the activities reinforce the network for mutual support, ensure the continuity of cultural tradition, and provide opportunities of expression and recognition of identity of the community, and thus are expected to promote the health of club members and other people in the community. Both the identity of the community to be expressed and those who recognize it are inevitable for the club activities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人類学・社会学

科研費の分科・細目：看護学 地域・老年看護学

キーワード：看護学，健康資源開発，里山，国土保全，女性高齢者，遊休農地，グループ農業，地域アイデンティティ

## 1. 研究開始当初の背景

日本の人口は今後急速に減少し、へき地や山間部だけでなく、地方小都市においてさえ深刻な高齢過疎化が進行すると予測されている。また、平成16年度から実施された「新

研修医制度」により、医療の質と量の地域格差が一層拡大することが危惧される。中山間地域では、過疎化によって高齢者、特に女性高齢者の人口に占める割合が増加し、一方では、遊休農地が増えて里山の自然環境も変質

し、野生動物の数が増加して、作物を荒らしたり、人を襲ったりするなど、経済面でも安全面でも問題が生じている。このような状況の下、(1)女性高齢者の社会支援ネットワークを確立・維持すること、(2)遊休農地を減らして里山を保全すること、および(3)健康資源の開発によって地域を再生することが喫緊の課題となっている。

近年、中山間地域において遊休農地を利用とした高齢者のグループ農業の試みが行われており、これらの問題に対する解決法になる可能性があると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、中山間地域において遊休農地を利用として行われている女性高齢者によるグループ農業の実態を研究することにより、里山の保全と健康資源としての効果的な利用のための諸条件を明らかにするとともに、実践事例を通して多面的かつ学際的な検討を加えることを目指した。具体的には次のようなことを明らかにしたいと考えた。

### (1)グループ農業の実態

- ①グループ農業活動に参加する女性高齢者の生活と健康に関わる活動と認識
- ②グループ農業活動に参加する女性高齢者の活動や認識と社会文化的・自然的環境の関係

### (2)グループ農業活動の健康への影響

### (3)里山の健康資源の利用方法としてのグループ農業が成立するための諸条件

## 3. 研究の方法

上記(1)の①については、参加観察とインタビューによった。(1)の②については参加観察を用いた民族誌的方法によった。

(2)については、当初、レシピ等からの医療コストと健康食品購入のコストに関する調査と客観的健康指標としての運動生理学的検査の実施を計画したが、実態調査を進めるうちに、グループ農業以外の活動の影響が多く見られることや、活動がメンバーに止まらないこと、メンバーごとに加齢による活動内容の変化が見られることなどが明らかになったので、効果の量的検討は断念し、インタビューと参加観察から得られる情報により、グループ農業がメンバーや共同体の人々の健康に及ぼす影響を検討した。

上記(1)と(2)にかかわるグループ農業の詳細な実態調査は、主として長野県の大鹿村のグループを対象として実施した。

(3)については、伊那谷の2地域におけるグループ農業の実態調査の結果、および伊那谷10箇所、木曾谷5箇所の農産物直売所における観察および聞き込み調査の結果について、それらに関わる文化的、社会的、地理的条件を抽出し、比較した。

農業グループの活動の参加観察とメンバーのグループインタビューは長野県看護大学の倫理審査を受け、承認を得て実施した(平成20年2月、#31)。

## 4. 研究成果

### (1)グループ農業の実態

大鹿村におけるグループ農業の活動の実態とその背景を参加観察とインタビューにより調査し、次のことが明らかになった。①グループ農業は地域の女性高齢者17,8人を中心とした活動であるが、建物の建造や耕作等の力仕事には男性も協力する。②利用する遊休農地は、地域の象徴である寺院と大イチョウのそばにあり、グループ農業は村落を挙げての活動という性格を帯びる。③作物は、特産の大豆や、コキビ、カボチャ等であり、道路の近くには村人や登山者の目を楽しませる様々な花を植えていた。④年長者がより多くの知識をもち、指導的な役割を果たすとともに、自らも積極的に作業を行なう傾向が見られた。⑤植え付けや除草には、村内の小学生が授業の一環として参加していた。⑥グループが主催する収穫祭は村内の子供や都会の親族、知人たちも参加し、世代間の交流や伝統の継承の場として機能していた。⑦グループの活動は自発的に行われ、参加者は、楽しく農業をすることをモットーにして活動を続け、「楽しい」、「元気になった」とグループ農業の良さを認めていた。⑧活動の継続には、参加者のグループ農業活動に対する志向や自発性の尊重、コミュニティの地理的条件、相互扶助の慣習、自然の景観、村・県の地域活性化支援対策が寄与していると考えられた。⑨収穫物は、収穫祭でふるまう餅などに利用され、販売もされるが、メンバーに分配できるほどの経済的利益は得られていなかった。

以上のように、大鹿村のグループの活動は、農作業以外にも多様な活動を含んでおり、それらの活動の背景と影響は、コミュニティと多面的に関連していた。

一方、飯田市近郊では6人前後で活動する女性グループが、河岸段丘の遊休農地で大豆とソバを栽培していた。活動は原則としてグループのメンバーだけで行い、農作業の後には、リーダーの自宅で茶話会を開いていた。耕作には賃借のトラクターを使用し、収穫物の売却利益や大豆で作った味噌は、貢献度に応じて分配していた。グループは、親睦および生産活動のための個人の任意の集まりという側面が強いが、グループ発足のきっかけが伝統の鯖鮭作りのために女性たちが集まったことであるという点には、地域共同体的要素が認められる。伝統製法の鯖鮭は、リーダーによって事業化され、農産物直売所で販売されていた。

なお、木曾谷ではグループ農業を行う団体の存在を確認できなかった。

### (2)グループ農業活動の健康への影響

グループ農業の活動はメンバーや他の住民の心身両面に良い影響を与え、影響の種類とそれが及ぶ範囲は、グループ農業活動が、①地域アイデンティティの表出としての性格を示す程度および②地域共同体の活動としての性格を示す程度とに規定されていた。精神面における効果は、地域アイデンティティの表出としての性格が強いほど、そして地域共同体の活動としての性格が強いほど、大きい。また、地域共同体の活動としての性格が強い場合、活動の影響は直接的なものだけでなく相互扶助ネットワークの強化や地域アイデンティティの強化を伴うため、メンバーだけでなくコミュニティ全体に及び、多面的であった。地域アイデンティティと地域共同体的な活動は相互促進的な関係にあるので、これらの効果は相乗的だと考えられる。

### (3)里山の健康資源の利用方法としてのグループ農業が成立するための諸条件

いずれの地域においても、グループ農業活動は、大なり小なり地域アイデンティティの表出としての性格を帯びており、グループ農業がみられなかった木曾谷でも、地域特産のスんぎツケの生産にはグループ活動が見られた。これらのことから、グループ農業の成立には、活動によって表出すべき地域アイデンティティの存在が必須の条件であると考えられる。

これに次いで重要なのは地域共同体意識の強さであると考えられる。大鹿村のような地域アイデンティティと共同体意識が十分強い場合には、経済性はほとんど問題にならない。収穫祭の際に収穫物で作った餅を来訪者たちに振舞うといった、地域アイデンティティの表出を効果的に行うための活動が経済性に優先する。

一方、飯田市近郊で行われているグループ農業は、発足の契機には祭りの鯖鮭の伝承という地域アイデンティティの要素を含むが、農業活動自体は生産と親睦を兼ねた個人の集まりで、アソシエーションとしての性格が強く、賃借のトラクターを耕作に使い、農作業に参加した時間に応じて利益を分配するなど、経済性やリーダーシップが成立の重要な条件になっていると思われた。

木曾谷のスんぎツケ生産のグループでは、生産物には地域アイデンティティが明瞭に認められるが、経済性と親睦を重視したアソシエーションとして性格が強いと思われる。

農産物直売所に出品される農産物は、伊那谷と木曾谷とで大きな違いが見られた。伊那谷では、果実類は、イチゴ、ブルーベリー、

モモ、ブドウ、リンゴ、カキ（甘柿と干柿）、ナシ、スイカなどが多く、一般に人気がある品種に加えて多様な地域特産品種や一般的ではない品種が多く見られた。また、野菜類では、アスパラガスやネギ、白菜、小松菜などの一般的なものに加えて、マコモタケ、ルバーブ、ギョウジャニンニク、辛味ダイコン、伝統品種のジャガイモ、ニンジン、カボチャ、キュウリ、ウリ、ナスや、激辛トウガラシなど地域性を強く意識したものが多くみられた。また、伊那谷南部では、冷涼な長野県の中でも温暖な気候を生かして栽培される茶も出品されており、秋には、クロカワやショウゲンジ、アミタケ、ジコボウなど、一般にはあまり流通していない種類のキノコが見られた。商品を買求める客は、観光客だけでなく、地元の人々も多くみられた。

一方、木曾谷地域では、農産物直売所に出品されている農作物は、地域特産のものや一風変わったものは少なく、伊那谷の特産である干柿（市田柿）を加工した菓子など長野県各地の他地域の産物や、北海道産の穀類も多く販売されていた。秋のキノコはマツタケが中心であった。ただし、食塩を使わず乳酸醗酵のみを利用した漬物である特産のスんぎツケは、その近くで作られたものが販売されており、グループで作られている場合もあった。商品を買求める客は、観光客が主であった。

直売所における農産物の販売は、木曾谷では観光客相手の一般的な経済活動として行われているが、伊那谷では農産物の販売と購入が経済活動としての側面と同程度あるいはそれ以上に地域アイデンティティの表出と認知という側面を強く持っていると考えられる。実際、価格も木曾谷より伊那谷の方が低い傾向がみられた。

グループ農業が地域アイデンティティの表出という側面をもつからには、それを認知する者の存在が必要である。伊那谷の場合、収穫祭や農産物直売所の状況から推測すると、地域アイデンティティの認知は、主に当該地区や近隣地区の住民や、地域をよく知る登山者などによって行われているものと思われる。一方、木曾谷で認知者の役割を期待されるのは観光客であるが、多くの場合、その地域アイデンティティの認知の目は粗く、一部の有名観光スポットを除くと、「信州」あるいは「木曾谷」といったレベルに留まるものと思われる。実際、スんぎツケが多く販売されるようになったのは、マスコミで健康食品として注目されるようになってからであるという。

以上のことから、里山におけるグループ農業の成立には地域アイデンティティの存在が必須の条件であり、さらにそれが里山の健康資源の活用として大きな効果を発揮する

ためには、地域共同体としての性格をもつ活動を織り込む必要があると考えられる。

(4)得られた成果の応用可能性と国内外の研究における位置づけ

この研究で得られた知見は、グループ農業だけでなく、里山における健康資源開発に広く応用できる可能性をもつ。すなわち、里山における効果的な健康資源の開発は、一般に、地域共同体の活動としての性格を帯びた地域アイデンティティの開発・育成という側面をもつものと推測される。したがって、地域アイデンティティに着目して健康資源を発掘し、その開発や育成を、地域共同体的要素を織り込んだ形で行うことにより、活動の参加者や地域住民の健康増進をはかることが可能になるであろう。

人間と自然とが作る持続可能なシステムとしての里山とその住民の健康との関係が注目されるようになったのは近年のことであり、現象のモデル化も実践的な応用方法も模索中の段階に止まっている。本研究の結果は、量的ではないが、明確でかつ実践に応用可能なモデルを提案するもので、学術上も応用上もその意義は大きい。

国際的にも、Satoyamaの概念は人類の未来を考える上で有用かつ重要な概念の一つとして注目されており、里山が地域アイデンティティの座としての側面をもつことを明らかにした本研究の成果は、大いに海外に向けて発信する価値があるものとする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①吉村隆, 北山秋雄: 山間地域に暮らす住民のソーシャルキャピタルに関する研究—グループ農業活動によるソーシャルキャピタル醸成の可能性の検討—. 信州公衆衛生学雑誌 (査読あり抄録), 5(1): 58-59, 2010.
- ②深山智代, 多賀谷昭, 北山秋雄, 那須裕, 野坂俊弥: 里山の環境を保全し健康資源として利用するための諸条件—高齢期の女性有志による里山の遊休農地を利用したグループ農業活動事例の調査から—. 長野県看護大学紀要 (査読制度あり招待), 12: 1-7, 2010.
- ③多賀谷昭, 深山智代, 北山秋雄, 那須裕, 野坂俊弥: 里山の健康資源開発としての遊休農地を利用したグループ農業. 信州公衆衛生雑誌 (査読あり抄録), 3(1): 74-75, 2008.

[学会発表] (計3件)

- ①吉村隆, 北山秋雄: 山間地域に暮らす住民

のソーシャルキャピタルに関する研究. 第5回信州公衆衛生学会, 2010年8月28日, 松本.

- ②多賀谷昭, 深山智代, 北山秋雄, 那須裕, 野坂俊弥: 里山における高齢女性の健康資源開発—遊休農地を利用した農業への参加と健康—. 平成19年度長野県看護大学研究集会, 2008年3月14日, 駒ヶ根市.
- ③多賀谷昭, 深山智代, 北山秋雄, 那須裕, 野坂俊弥: 里山の健康資源開発としての遊休農地を利用したグループ農業, 第3回信州公衆衛生学会, 2008年8月30日, 駒ヶ根市.

[その他]

ホームページ等

[http://www.nagano-nurs.ac.jp/kiyou/pdf/Bull.\\_Nagano\\_Coll.%20Nurs\\_Vol12\\_01-07.pdf](http://www.nagano-nurs.ac.jp/kiyou/pdf/Bull._Nagano_Coll.%20Nurs_Vol12_01-07.pdf)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

(2010年度)

多賀谷 昭 (TAGAYA AKIRA)  
長野県看護大学・看護学部・教授  
研究者番号: 70117951

(2007~2009年度)

深山 智代 (MIYAMA TOMOYO)  
長野県看護大学・看護学部・学長(現名誉教授)  
研究者番号: 70060746

(2) 研究分担者

北山 秋雄 (KITAYAMA AKIO)  
長野県看護大学・看護学部・教授  
研究者番号: 70214822  
那須 裕 (NASU YUTAKA)  
長野県看護大学・看護学部・教授  
研究者番号: 50020839  
野坂 俊弥 (NOSAKA TOSHIYA)  
長野県看護大学・看護学部・准教授  
研究者番号: 90281253

(3) 連携研究者

( )

研究者番号:

(4) 研究協力者

吉村 隆 (YOSHIMURA TAKASHI)  
長野県看護大学大学院・博士後期課程